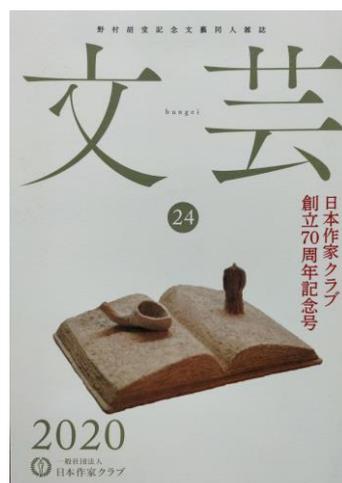


その 44
ひめゆりの乙女たちの
「海ゆかば」



先月から、日本作家クラブ発行の文芸誌『文芸』誌上に掲載した、2008年から10年余りにわたる、波乱万丈の「わが万葉集物語」を加筆転載しているが、今月はその2回目、2020年11月発行の『文芸』24号からの転載である。

日本作家クラブは、昭和24（1949）年、「銭形平次」シリーズの著者野村胡堂を理事長に、「捕物作家クラブ」として発足、昭和35（1960）年に「日本作家クラブ」に改称した。初期の会員には、江戸川乱歩、海音寺潮五郎、川口松太郎、山手樹一郎、山岡荘八、横溝正史、吉川英治等錚々たる文豪が名を連ねていた。発足当初から純文学至上主義とは一線を画し、幅広く多様な表現者たちが参集し、互いに切磋琢磨し合う活動を続けている。平成6年に『文芸』を創刊し、現在まで25号を発行している。

そこで、先月は2019年2月発行の『文芸』23号で、同誌編集人のインタビュー形式で、万葉集に関わることになったきっかけから、同年3月の鳥取公演直前に至るまでの経緯についてまとめたものである。つまり、同誌発行の1か月後に鳥取で公演があったわけだが、その直後に、思いがけない、まさに降って湧いたような事態が出来し、わが万葉集物語は新たな展開を見せるのだが、今回は、その前のもう1つの舞台の話から始めることとする。

『文芸』23号が発行された2019年2月、私はある人から声をかけられ、東京都下多摩市にあるホールで、彼が出演する舞台を見に行った。前号の拙稿で、演劇とは全く縁もゆかりもなかった私が、鳥取で上演予定の大伴家持の音楽朗読劇の企画、脚本を担当している、と書いたところ、たまたまめぐり巡って、そのある人から連絡があったことから、それまですっかり忘れ去っていた記憶が蘇ってきたのである。それが、自分は、まったく縁もゆかりもなかったと思っていた演劇とささやかながら接点があったことだった。その演劇との縁というのが、小学校時代に入団した児童劇団で、そのある人Hさんは、その1期生、6年上の先輩だった。

私が生まれ育った甲府市は、昭和20年7月6日から7日にかけて、七夕空襲とも呼ばれる米軍の空襲を受け、市内の7割近くが焼失、焼け野原となった。私が5歳の時のことで、焼夷弾で焼け落ちる家々を後に妹を背負った母の手を引っ張って町の郊外に逃げた（自身はそのつもりだったが、手を引きずられて、

というのが実態だったろう)。戦後、何の娯楽もなくなった子どもたちを気の毒に思った大人たち、特に市内の小学校の教師たちが中心になり、「山梨児童文化連盟」、略称「童連」と呼ばれた児童劇団を立ち上げた。「焼け跡の子どもたちに、『文化の花束』を、キャッチフレーズに、劇部、音楽部、舞踊部の3つの部で、春秋2回、1日3回2日間の公演は、娯楽に飢えた子供たちで毎回超満員の人気だったという。

その後、童連創立者の1人横山昭作先生は、乞われて東京成城学園に移り、小学校、幼稚園の校長を勤められた。日本エッセイスト・クラブ所属の名エッセイストで、多くのエッセイを書かれたが、後年の作品に次のくだりが残されていた。「戦後の混乱からいち早く立ち上がり、児童文化の花を咲かせた業績は、自分から言うのはおこがましいかもしれぬが、これは特筆しておかねばならぬことだと思う」

もう1人、テレビ時代の幕開けと同時に東京に呼び出され、ラジオ「赤胴鈴之助」やテレビの人気番組「三匹の侍」、「新五捕り物帖」など、生涯3000本以上もの脚本を書き上げ、テレビ時代の申し子とも呼ばれた劇作家の竹内勇太郎さんもいる。

指導者のほとんどが亡くなられた中で、当時お嬢さん先生と呼ばれたK先生（現在95歳）お1人が今も健在で、当時のことを明晰に覚えていて、「子供たちはもとより、童連は教師たちにとって、とても楽しいものだった」と回想する。

ところで、童連1期生だったそのHさんからの連絡で、私も童連最後の1年に劇部に在籍していたことを思い出した。そのK先生が、私の小学校3年から6年までの受持ちで、先生に憧れて童連に入ったからだった。しかし、入ったはいいが、童連最後の年ということもあり、まったく記憶がないのである。それにもかかわらず、童連がきっかけで、その後NHKに入ることになったことだけは覚えていて、その経緯などは、前号に書いた通りである。

Hさん（現在87歳）も、童連に入ったことがきっかけで演劇の世界に興味を持ち、一時はその道に進むことを考えたという。しかし、物づくりが好きだったことから、理系の大学に進んで技術者となり、定年後の今も技術コンサルタントの仕事をしている。その傍ら、仲間と語らって、かつて好きだった童連の歩みを記録する活動に取り組んで、すでに30年になるということだった。

Hさんは、2018年夏、読売新聞の取材を受け、「甲府空襲、希望の児童劇団」という見出しで、その「童連の歩みを記録する会」の活動が、写真付きで大きく報道された。その特集記事が、たまたまHさんが住む多摩市で毎年行われている平和まつりの関係者の目にとまり、まつりで上演される平和劇の制作を手伝うことになった。出し物は、沖縄戦に狩り出されたひめゆり学徒隊の話を舞台化した「ひめゆりの乙女たち」。最初は、裏方だけのつもりだったが、Hさんも役に付くことになり、娘の塚を訪ねていく父親役として出演することになった。童連の後、中学、高校の演劇部やそのOBによるアマチュア劇など、お芝居の裏方は、何度か務めたことはあったが、舞台に上がるのは、童連以来、70年ぶりのことだと言う。

私が、その特集記事を読んだのが、年が明けて1月。回りまわって、私が童連に所属していたらいいということで、「会報に、当時の思い出話を書かないか」という連絡が入った。そこで、考えてみると、ちょうどその頃、私

も音楽朗読劇の制作準備で大変な時期だったことから、「この苦労の原点は、もしかしたら童連だったのかも」ということに思い至ったのである。

そこで、そのあたりのことを、メールで返信したところ、早速 2 月 10 日の「ひめゆりの乙女たち」の招待券を送っていただいたのが、ことの始まりだった。

その舞台は、なかなかの出来栄であった。主に地元の中학생たちが、ひめゆり学徒隊を演じたのだが、その懸命さが客席に伝わってきて、見る人の心を揺り動かした。子どもたちは、その前年の 10 月から毎週日曜日に集まって練習を繰り返したという。Hさんは、戦争を知らない子どもたちや先生方に向けて、「あの時代を実感して舞台に立とう！」という資料を手作りして、自らの甲府の七夕空襲の体験を話したり、また、いろいろな機会をとらえて、戦争の悲劇を語り伝えたりしていた。Hさんの話は、私自身 5 歳の時に逃げ惑った七夕空襲の夜をまざまざと思い起させ、共感するところが多かった。

言うまでもなく、沖縄戦は昭和 20 年 3 月に始まり、米軍はその後すぐ沖縄本島に上陸している。沖縄師範女子部と第一高等女学校の生徒 221 名は、教師 18 人に引率されて、ひめゆり学徒隊として陸軍病院に動員された。砲煙弾雨の中、彼女たちは負傷兵の手当てや雑役に従事、最後は、沖縄本島南端の喜屋武岬に追いつめられていく。そして、舞台は、「君たちは生きて生きて生き抜くんだ」という教師の叫び声の後、米兵の「ホールド・アップ！」という大声と銃声が響いて終わる。

その 2 つの声は、会場内の人々にまで迫ってくるようだった。事実は、逃げ場を失った乙女たちの 1 部は自決した、とされているが、その半数以上が帰らぬ人となった。



ひめゆり学徒隊散華の碑

劇中、彼女たちが、皇居に向かって軍歌「海ゆかば」を歌うシーンは、とりわけ痛々しかった。

「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ かへり見はせじ」と歌う軍歌「海ゆかば」は、太平洋戦争中、戦意高揚や大本営発表時にしきりに歌われ、準国歌とされた。そして、歌の後、軍の指導教官が、彼女たちに向かって言う、「お国を守るための『楯』になるのだ」というセリフが、心に刺さった。

Hさんは、この時初めて多摩平和まつりに参加したが、平和まつりは、これまですでに 25 回もの演劇公演

の実績があり、10 人ほどの実行委員会は、主に教職員組合で活動していた先生方が、そのメンバーの中心となっていた。平和活動と共に、参加することも達の教育的な面をもっており、出演児童の中には、いろいろな悩みや問題を抱えている子もいて、劇に参加することで学校や家庭にない自分の居場所を感じたりして、演技以上の成長を見せるなど、人間教育的側面も大事に考えていた。稽古を休んだりする子もいて、親と連絡を取り合いながら、我慢強く皆の仲間に入れてきた。正直なところリハーサルまではこんな調子で、本番はどうなるかと思っていたが、そんな子も含めて子どもたちは真剣に良い舞台を作ってくれた。

「本気でやればやれるんだ」という姿を見せてくれたことで、大人の演劇集団と違う、この演劇公演の特徴を理解することができた、という。

そして、敗戦により国土が荒廃し、空襲という戦争の悪魔が、一夜にして多くの人生を焼き尽くしたあの七夕の夜の惨劇を思い出し、70 年前「童連」が子どもたちに与えてくれたものは、まさに「文化の花束」だったことを思い出させてくれた舞台だった。



「ひめゆりの乙女たち」の舞台

「ひめゆりの乙女たち」の劇中、「海ゆかば」の軍歌の他に、もう 1 曲、女学生たちによる美しい歌が使われていた。その調べは、なんとも令しく、また愛おしい歌曲だったという印象はあるが、公演当日は、この歌について、その詳細を知る由もなかった。そして後日、この歌に秘められた悲しい歴史を初めて知ることになった。

それによると、この歌は、「^{そうしじゅ}相思樹の歌」という、ひめゆりの乙女たちのための歌だった。作詞の太田博は、沖縄高射砲部隊の小隊長で、ひめゆり学徒隊の指導に当たっていた。彼女たちの学芸会に招待された太田少尉は、来春の卒業のはなむけとして、校門前の相思樹の並木に寄せて詩を作り贈った。それに曲をつけたのが、学徒隊の教師、^{こちんだ}東風平恵位だった。東風平は、沖縄生れで、幼いときから音感に優れ、上野の音楽学校（現在の東京芸大音楽科）を卒業して、沖縄師範学校の教師となっていた。

この歌に感動した女学生たちは卒業式で歌いたいと願い練習に励んだ。そのため、この「相思樹の歌」を、彼女たちは「別れの歌」とも呼ぶようになった。しかし、卒業式では歌うことが禁じられ、この歌が披露されることはなかった。この歌の代わりに卒業式で歌わされたのが、あの「海ゆかば」だったことを知った時には、沖縄の女学校の卒業式まで軍歌が強制されたことに言葉もなかった。（前述した K 先生も、女子師範の卒業式の歌が「海ゆかば」だったという）

それから 3 か月後の 6 月、追いつめられた彼女たちは死の間際に、この「相思樹の歌」を合唱し死んでいったという。そして、「草生す屍」となった学徒隊の犠牲者は、136 名。ともに犠牲となった東風平は 23 歳。作詞した福島出身の詩人、太田少尉も、同じ 6 月、戦死。同じく 25 歳という若さだった。

「海ゆかば」が、特攻隊など若き男児たちの最後の歌となり、「相思樹の歌」は、ひめゆりの乙女たちの最後の歌となった。彼女たちにとっては、友との「別れの歌」となり、まさに自らの生との「別れの歌」となったのである。

この舞台の幕が下りた後のロビーで、Hさんは、もう1人童連1期生のKさんを紹介してくれた。「童連の歩みを記録する会」のメンバーで、主に「童連OBだより」の会報の編集にあたっているという。この日も、Hさんの舞台の撮影に忙しくしていたKさんに、「童連を記録する会」に関わるようになった経緯を聞いた。それによると、童連で何度も舞台に立った後、中学では演劇部だったが、高校では美術部に所属。しかし、童連で体感した舞台への思い断ちがたく、大学では学園祭の時クラスの皆に囚って芝居に取り組んだりした。卒業後は、教師となり小中学校に務めることになるが、演劇部を作り生徒たちをいろんな劇団に引率しては、鑑賞教室を開くなど、演劇教育に取り組んだと言う。Kさんは、童連の時に先生方から贈られた「文化の花束」を、今度は教師として生徒たちに贈り続けてきたことになる。

春に甘い香りの金色の小さな花をつけるミモザ、或いはアカシア属の木を、沖縄などでは「相思樹」と呼ぶ。美しい呼び名だ。花言葉は友情。「相思」と聞くと、すぐ「相思相愛」という言葉が思い浮かぶが、万葉秀歌には、「相思」という万葉仮名で始まる、次のような有名な歌がある。

「相思はぬ 人を思ふは 大寺の 餓鬼の後（しりへ）に 額づくがごと」

（思ってもくれない人を思うなんて、大寺の餓鬼像を後ろから伏して拝むようなもの）

「相思」とは逆の片思いの歌ではあるが、いかにもユーモアに溢れながら、切ない恋心を歌っている。そして、こんな恋心をぶつけられたのが、他ならぬ大伴家持だった。

そして、この「ひめゆりの乙女たち」の舞台のちょうど1か月後、2019年3月9日に、鳥取で、私たちの家持の舞台が上演されることになるのだが、そのテーマの1つが、家持作詞とされる軍歌「海ゆかば」であり、防人の「醜の御楯」の歌だったのである。Hさんにとって70年目の舞台だった「ひめゆりの乙女たち」、そして、私にとっても70年目の舞台となる万葉朗読劇「いや重けよごと～愛のものふ大伴家持」……この2つの舞台は、奇しくも同じテーマで結ばれていたのである。 (続く)



女子師範・一高女正門と相思樹の並木
宮城喜久子『ひめゆりの少女』(1995年、高文研刊)